幻想のイデア

榎河友聖

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
幻想のイデア

【Ｎコード】
Ｎ００６３ＢＡ

【作者名】
榎河友聖

【あらすじ】
この世に絶望し、自ら命を絶った少年は、気がつけば、別の世界で生き延びていた。
遺書は、第二の人生謳歌したまえ、と改竄されていた。
幻想の世界で、新たな人生を少年は歩めるのか。

01　始まりは森の中に

……この世は、理不尽過ぎる。

一人の少年が、木に吊された縄の輪っかに手を掛ける。

辺りは、暗く、黒い髪は闇に紛れ、お隣の家で飼われている梟の鳴き声が聞こえる。驚くほど、しんとして静まり返った時……なる程、人が死ぬ時というのはこういう時――瞬間をいうのかもしれない。

……未練は、無い。無い……はずだ。両親はいないし、親しい友とも別れた。恋い慕う人もいなければ、自分を想ってくれる人もいない。そうでなければ、自分は……。

「……」

輪っかにゆっくりと静かに、顎を乗せていく……。

足を乗せた小さな梯子を見て、少年は、目を閉じ、この世に別れを告げる。

さようなら。

ガン、と梯子が地面に倒れる音が梟の鳴き声と混ざり合って、奇怪な音だった。最後の音だった。

＊

ふと、目が覚めた。

あれ、と思った。確かに自分は……。

不思議に思って、辺りを見渡してみると、風景がある。朝の日差しが照る、田舎道――そんなところか。

指先の感覚を確かめ、少年は立ち上がり、服装を確認する。

黒っぽい色のブレザー、同色のズボン、カッターシャツ……間違

いない。自分の学校の服……最後まで着ていた服だ。靴もそのままだった。
死に損ねた？　夢だったのか、あれは……いや、そんなはずは……。しかし、この風景は、見たことがない。こっちが夢か？　いや、指先の感覚はある。
「あー……」
声も、出る。では、一体何が。
「……そういえば」
少年は、制服のポケットを漁る。
「あった」
取り出した物は、一枚の紙……いうなれば自分の遺書だ。今思えば、こんなものを書くあたり、未練があったのかもしれない。それもどうでもいい話だが。
本題は、これで自分は生きてしまっているということだ。こんなに細かい夢など見た例がない。そういえば走馬灯も見ていない。
しかし、改めて、生きていると実感すると何とも奇妙なものだ。
ガサと自分の遺書を開く。自分の遺書を読むのも変な話だ。
そう思い、読み出すと、ん？　と思う。
書かれている内容が、自分の記憶にない。
一言一句、全部が違う。
書かれていた内容はこうだ。
『ようこそ、幻想の世界へ。第二の人生、リタイアせず謳歌したまえ』
……。
ある種の悪夢だ、これは。
だが、夢ではない。書かれている幻想の世界でもない。紛れもない現実だ、これは。
どうも、まだ死ねない身であるらしい。
人生、自分の思い通りにならないとよく言うが、まさか、望んだ死も思い通りにならないとは。

「……はぁ」
自然と出た溜め息に、少年は、先ほどまでの自分に別れの意を込めた。
生きるべきか、死すべきか、それが問題だ……これを言ったのはシェークスピアだったか。どうも、自分は生きるべきのようだ。
負けず嫌いの自分が、一度全部に負けた。同じ屈辱は味わえない。それに、この遺書であったものは自分を挑発している……生けるのなら生きてみろと。
「……誰の悪戯か知らんが、ただじゃ死なないぞ、俺は。
こう挑発されるとなると……何が何でも生きてやろうじゃねぇか」
少年――八坂央真（ヤサカオウマ）は、紙を破り捨てた。

＊

「――しかし、どうしようか。する事がない……そもそも……」
そもそも、此処は何処なんだか。気づけば、何もわからない。八方塞がりとはこのことか。
「幻想の世界……違う世界と考えるのが普通か」
取り敢えず歩いても辺りは相変わらずの田舎道。見た感じ、自分の世界とは、大差無い。木――如いては植物に詳しくはないので、唯一見られる生きているものの違いも無く思える。
「どうしたものか。初っぱなからこれじゃあな」
後悔は読んで字の如く、後から悔やむものだと実感させられる。
「ん、ここからは森の道か」
暫く歩くと、森の入り口に突き当たった。他に道はないようだ。
取り敢えず、この森を抜けることにした。

＊

辺り一面が木。

まぁ、珍しい風景だ。元の世界じゃ中々お目にかかることが出来ないんじゃないか、と央真は思う。富士の樹海はこんな感じだろうか……そんなことを考えると、此処に入ったのが失敗だったように思える。いや、失敗だったのだろう。方位磁針も何も無いのにどうして、此処から無事に出て来れるだろうか。

……早速、背の低い木の枝に頭を打ちつけた。身長は一七〇センチ程度でも、こんな目に遭うとは。

「くそ……」

痛む頭を抑え、足下と頭上に気をつけて、央真は森の深部へと進んでいった。

進む途中、獣と思しき鳴き声が何度か聞こえた。ああ、やっぱり生き物がいるんだと思った。

暫く進んで行くと、今度は人の話し声と思える音が聞こえた。

（……話し声……か？）

足音と気配を殺し、その音源にひっそりと近づいて行った。

「……」

一本の大木の影に隠れ、覗くと、三人の人間がいた。

スキンヘッドの三人組。服装も袖を無理やり破った皮っぽい服でほぼ同じ。ズボンはジーンズっぽい。体型は、チビとデブとノッポ。

――なんつーステレオタイプの悪党か。世紀末でヒャッハーしてるような小悪党だな。

そんな考えで、もっと見てみようと身を乗り出したのが運の尽き。

ベキッ。

足下で、そう音が鳴った。見ると、折れた枝が。

「あ」

声を出さなければ、ばれることもなかったろうに。

「ああ！？　誰かいるのかァ！？」

デブが叫ぶ。

――言葉が通じた……そんなことはどうだっていい。ああ、またなんつー典型的なミスを……。

第二の人生は、幸先の悪いスタートとなった。
小悪党共が、斧、剣といった凶器の類を持って、央真の前に立った。
「……特殊な能力とか、ないんですかねぇ……はは……」
やっぱり、悪夢であってほしい。これが夢ならばの話だが。

01　始まりは森の中に（後書き）

年末に投稿とか、俺何やってんだろ。
でも、そんなことはどうだっていい。重要なことじゃない。
何だっていい、小説を投稿するチャンスだ！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0063ba/

幻想のイデア

2011年12月31日01時45分発行